

あかまきがみあおまきがみきまきがみ・・・

徳川の天下の蔭で・・・





今川義元は公家かぶれのお齒黒首か？

徳川300年の歴史を剥いで
埋もれた声を掘り起こす

豊臣秀吉は成金趣味の耄碌爺いか？



松平広忠

家康の父

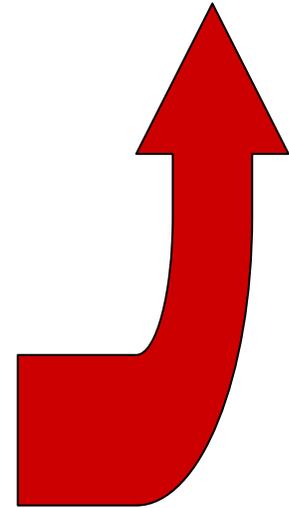
親戚とケンカし、
岡崎城にいられなくなり、
伊勢に逃亡

松平広忠

岡崎城



今川義元



お城に帰りたい！

そうだ、有力者に頼もう！

その時のことを語った史料が3つあります。

あれ？ 言ってることが少しずつ違う！

家忠日記

安部大蔵は駿河に行つて、今川義元に広忠の岡崎帰城のことを相談した。義元は、廃れた家を興すのは武家の名誉だ、広忠の父清康とは昔からつきあいも深いことだし、と熱心に相談に乗ってくれた。大蔵は大喜びで広忠のもとに帰った。

松平記

広忠は駿河へ行つて、
今川殿に頼みなさつた
ところ、今川殿は前々
からのつきあいもある
ので、何とか岡崎へ歸
してやるうづと仰せら
れた。

三河物語

安部大蔵が広忠を連れ
て駿河に頼みに行つた
ので、今川殿は御無沙
汰あるまじき由を仰せ
られた。

問3

- A 家忠日記
- B 松平記
- C 三河物語

信憑性の高い順に並べてみてください。

推定理由も添えること

A 家忠日記

B 松平記

C 三河物語

3者の違いは・・・

3者の違いは・・・

1. 長さ

2. 行った人

家臣の安部か 広忠本人か 両方か



3. 義元の応対

家忠日記

安部大蔵は駿河に行つて、今川義元に広忠の岡崎帰城のことを相談した。義元は、廃れた家を興すのは武家の名誉だ、広忠の父清康とは昔からつきあいも深いことだし、と熱心に相談に乗ってくれた。大蔵は大喜びで広忠のもとに帰った。

家忠日記

安部大蔵は駿河に行つて、今川義元に広忠の岡崎帰城のことを相談した。義元は、**廃れた家を興すのは武家の名誉だ、広忠の父清康とは昔からつきあいも深いことだし、と熱心に相談に乗ってくれた。**大蔵は大喜びで広忠のもとに帰った。

松平記

広忠は駿河へ行つて、
今川殿に頼みなさつた
ところ、今川殿は前々
からのつきあいもある
ので、何とか岡崎へ歸
してやるうづと仰せら
れた。

三河物語

安部大蔵が広忠を連れ
て駿河に頼みに行つた
ので、今川殿は御無沙
汰あるまじき由を仰せ
られた。

義元の対応の変化

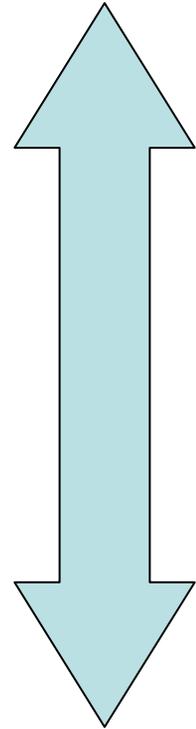
A 武家の名誉だ！

B 何とかしよう

C 粗略にはしないぞ

どちらが真実に近いのか？

熱心



冷淡

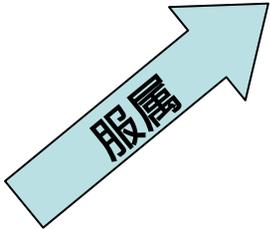
徳川(松平)の立場に立って考えてみる



桶狭間



今川義元



松平家

徳川(松平)の立場に立って考えてみる



今川氏真

松平家

最終的に今川家を滅ぼしたのは家康

義元の対応の変化

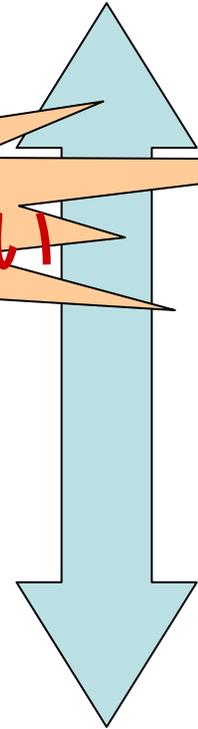
A 武家の名誉だ！

義元から恩義を受けた話は都合が悪い

B 何とんじやう

C 粗略にはしないぞ

熱心



冷淡

どちらが真実に近いのか？

問3

A 家忠日記

B 松平記

C 三河物語

$A > B > C$

信憑性の高い順に並べてみてください。

推定理由も添えること

収穫：それぞれの史料の信憑性がわかった

家忠日記

安部大蔵は駿河に行つて、今川義元に広忠の岡崎帰城のことを相談した。義元は、廃れた家を興すのは武家の名誉だ、広忠の父清康とは昔からつきあいも深いことだし、と熱心に相談に乗ってくれた。大蔵は大喜びで広忠のもとに帰った。

家忠日記

安部大蔵は駿河に行つて、今川義元に広忠の岡崎帰城のことを相談した。義元は、廃れた家を興すのは武家の名誉だ、広忠の父清康とは昔からつきあいも深いことだし、と熱心に相談に乗ってくれた。大蔵は大喜びで広忠のもとに帰った。

松平記

広忠は駿河へ行つて、
今川殿に頼みなさつた
ところ、今川殿は前々
からのつきあいもある
ので、何とか岡崎へ歸
してやるうづと仰せら
れた。

松平記

広忠は駿河へ行つて、
今川殿に頼みなさつた
ところ、今川殿は前々
からのつきあいもある
ので、何とか岡崎へ歸
してやるうづと仰せら
れた。

三河物語

安部大蔵が広忠を連れ
て駿河に頼みに行つた
ので、今川殿は御無沙
汰あるまじき由を仰せ
られた。

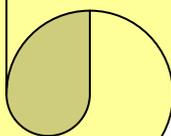
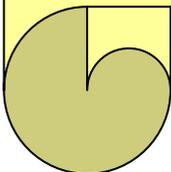
三河物語

安部大蔵が広忠を連れ
て駿河に頼みに行つた
ので、今川殿は御無沙
汰あるまじき由を仰せ
られた。

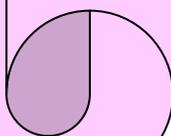
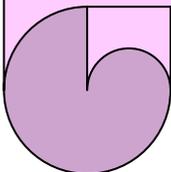
家忠日記



松平記



三河物語



他の事件について読み比べてみる

家忠日記

竹千代を迎えた義元は、
大いに喜んで駿府に館
を新築し、家臣を付け
て慇懃に扱った。

三河物語

竹千代様は七歳から十
九歳までの人質暮らし。
ご心労なさったことは
言葉に言い表せない程
で、鷹一羽飛ばすのま
で、遠慮なさつておら
れた。

家忠日記

大神君（家康）が成長するまでは三河は義元が預かることになったので、三河にいた家臣たちは領地を横領されるのではないかと心配した。それを聞きになった大神君は「皆の領地は今まで通り保証する」という書き付けを下賜なされた。そこで、家臣たちは疑いが晴れて安心した。

松平記

竹千代の成人までは今川殿が知行を預かることとなり、駿府から代官がやってきたので、譜代衆はとても迷惑した。

三河物語

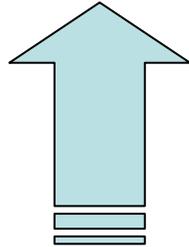
三河の年貢は残らず今
川殿へ横領され、譜代
衆は百姓同然に鋤を
取つてようよう妻子を
養い、駿河衆に会つた
時ははいつくばつてご
機嫌をとり、戦ではい
つも先駆けを命ぜられ
てたくさんの戦死者を
出しと、それはそれは
苦勞したものじゃ。

	家忠日記	松平記	三河物語
広忠への義 元の応対	熱心	ほどほど	冷淡
人質竹千代 の扱い	厚遇	(記録なし)	心労
留守の間の 家臣たち	安心した	迷惑した	究極の苦労

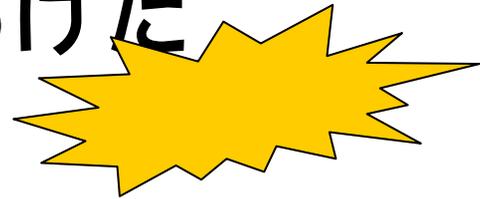
世に流布している

「人質竹千代&家臣 苦勞物語」は、

かなりマユツバ



今川を悪役にするため
徳川サイドがでっちあげた



義元の非運



たまたま援助した小豪族松平が、
のちに今川を滅ぼして天下をとるに至った

犠牲者がもうひとり・・・

家忠日記

氏真、遊興を好んで武
義を忘れ、奢侈積悪身
に余る、是れ亡国の端
なり。

三河物語

さてもさても阿呆人か
な。

武田勝頼



偉大なる父を持った2人

	今川氏真	武田勝頼
生没年	1538 ~ 1614	1546 ~ 1582
家督相続時の状況と年齢	1560年桶狭間にて父義元、戦死 相続時に23歳	1573年信濃陣中にて父信玄、病没 相続時に28歳
領国滅亡	9年後の1569年 敵は武田・徳川連合軍	9年後の1582年 敵は織田・徳川連合軍

偉大なる父を持った2人

	今川氏真	武田勝頼
生没年	1538 ~ 1614	1546 ~ 1582
家督相続時の状況と年齢	1560年桶狭間にて父義元、戦死 相続時に 23歳	1573年信濃陣中にて父信玄、病没 相続時に 28歳
領国滅亡	9年後 の1569年 敵は武田・徳川連合軍	9年後 の1582年 敵は織田・徳川連合軍

ともに父の死後、9年もがんばったのに
氏真への糾弾のほうか、はるかに激しい

理由は・・・



愚かな氏真めは
自滅したのじゃ。



課題

勝者の蔭に敗者あり。

家康の蔭に暴君・愚君扱いされてしまった
今川義元・氏真親子あり。

そこで義元か氏真に成り代わって

講義内容を踏まえ

現代日本人へのメッセージをどうぞ。

字数は150～200字程度
解答時間は5分です。

講義中に出された上記の課題に対し、
230人の東工大生が真剣に考えて提出したなかから、
個性ゆたかな7つの作品を選んでお届けします。
「補足資料」をごらんください。

余白に…

信長伝説 『蘇鉄の怪』

この人は誰？

外鏡之怪ヲ見ル圖

絵師 月岡芳年



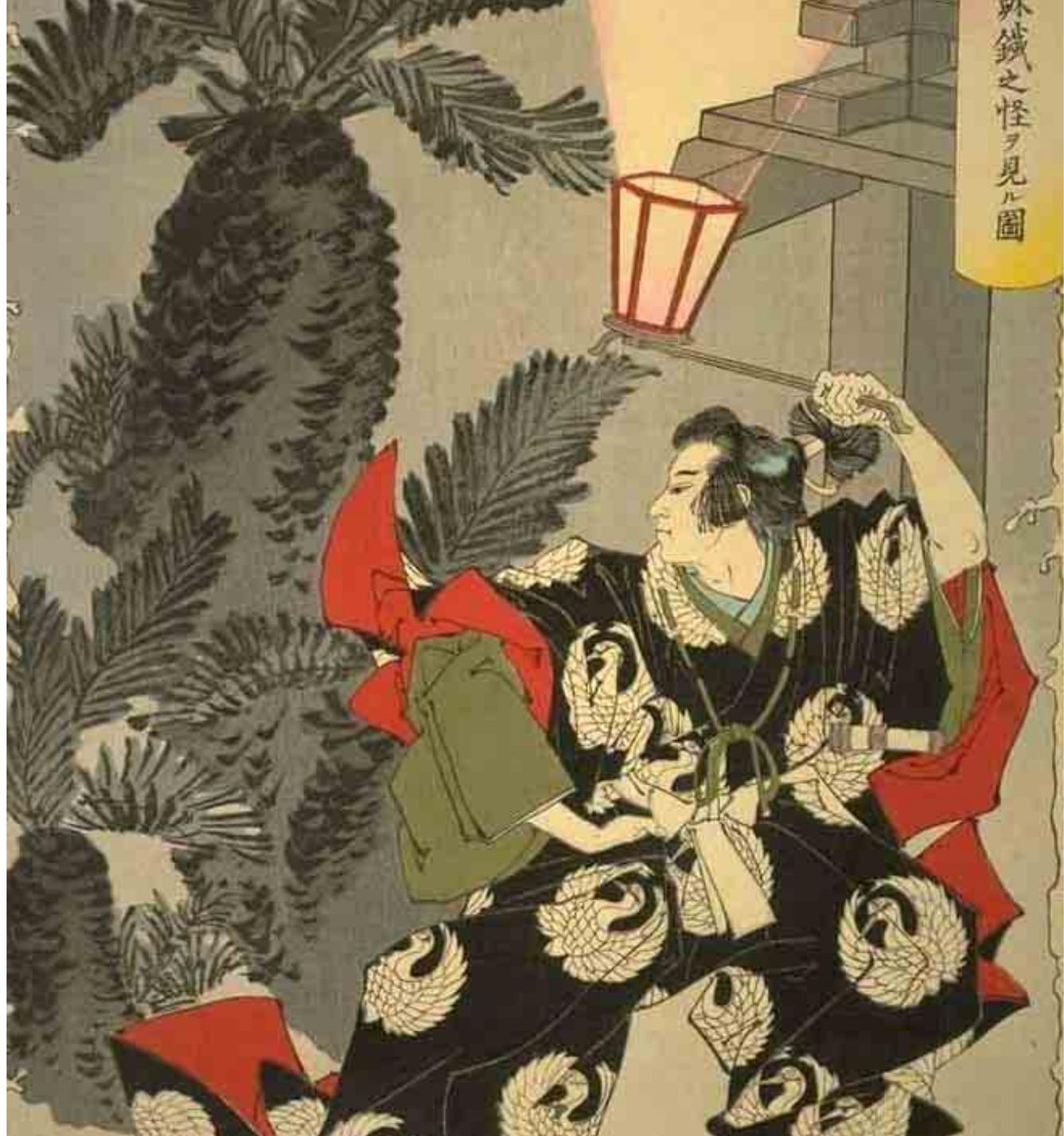
蘭丸、蘇鉄ノ怪ヲ見ル凶

森蘭丸

信長の小姓
十八歳



外鏡之怪ヲ見ル圖



森蘭丸長安

市川左團治

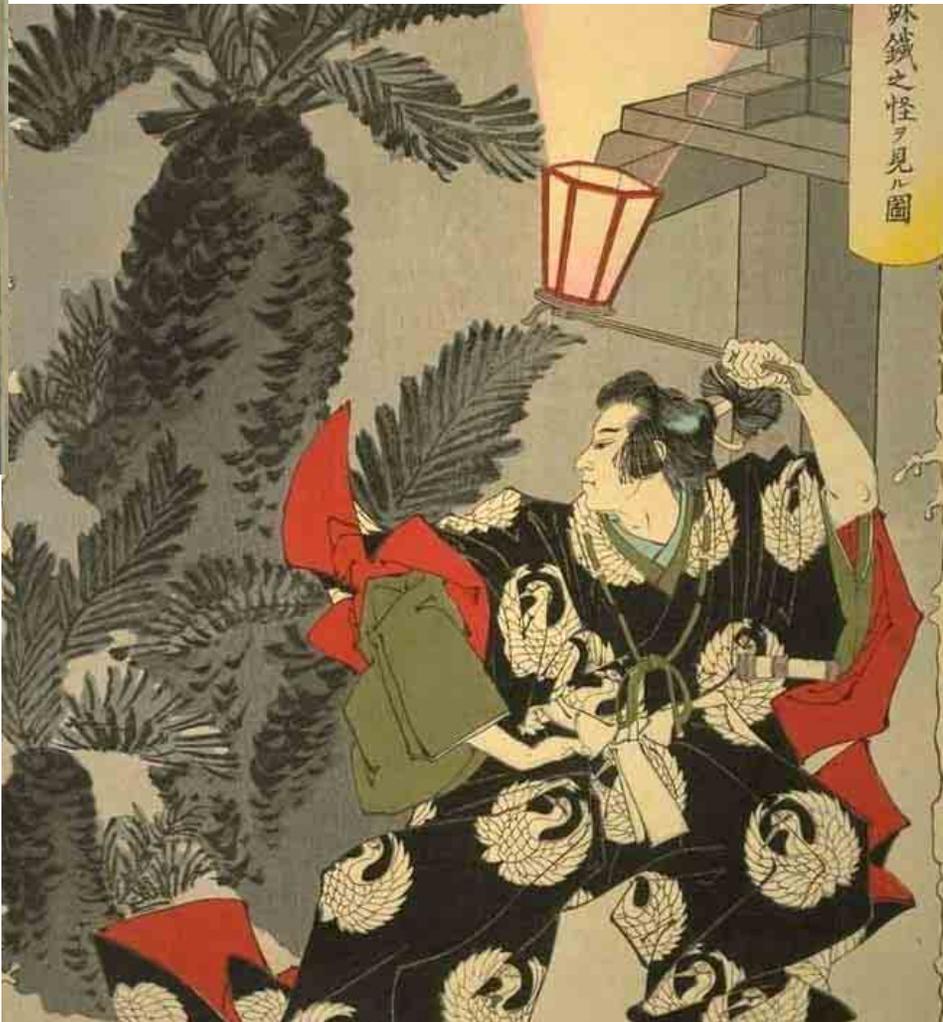
附談 正流齋 南窓 席讀切

夜一方を告げりもの彼歌陽子秋
 聲をよめと懐然として之を聴よ波清
 夜驚き風雨の俄に至が如し蘭丸出て之を視よと
 右府の命を畏れて下より庭か物も争ふ名はこと乃
 間より魔異哉此そつて泉州塚妙國寺に年歴
 一名小なる故も斯る奇怪の靈有りて彼地へ飯
 たりくと説く所あり有しと云

轉々堂主人記

具足屋





夜にあたりて声ある
ものは（略）波濤夜
おどろき、風雨の俄
かに至るが如し。蘭
丸、出て之を視よと
右府の命を畏みて、
下りたつ庭に物もな
く、こえはそてつの
間にあり。

ああ、異なるかな、
此のそてつは泉州
堺妙国寺に年歴し
名木なる故にや、
かかかる奇怪の靈あ
つて、彼の地へ歸
らうと歸らうと訴ふ
声にてありしとぞ。

外鏡之怪ヲ見ル圖

根も葉もない伝説？

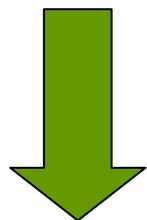


信長の二条邸建設

東山慈照院殿御庭に
一年立て置かれ候
九山八海と申候て、
都鄙に隠れなき名石
御座候、これまた召し
寄せられ、御庭に居え
させられ、そのほか
洛中・洛外の名石・名
木を集め

ソテツのお化け伝説ができるまで

名石・名木を集めて
自分の城に据えた信長



人々の驚き

名木の悲嘆の物語

蘇鉄・南蛮趣味

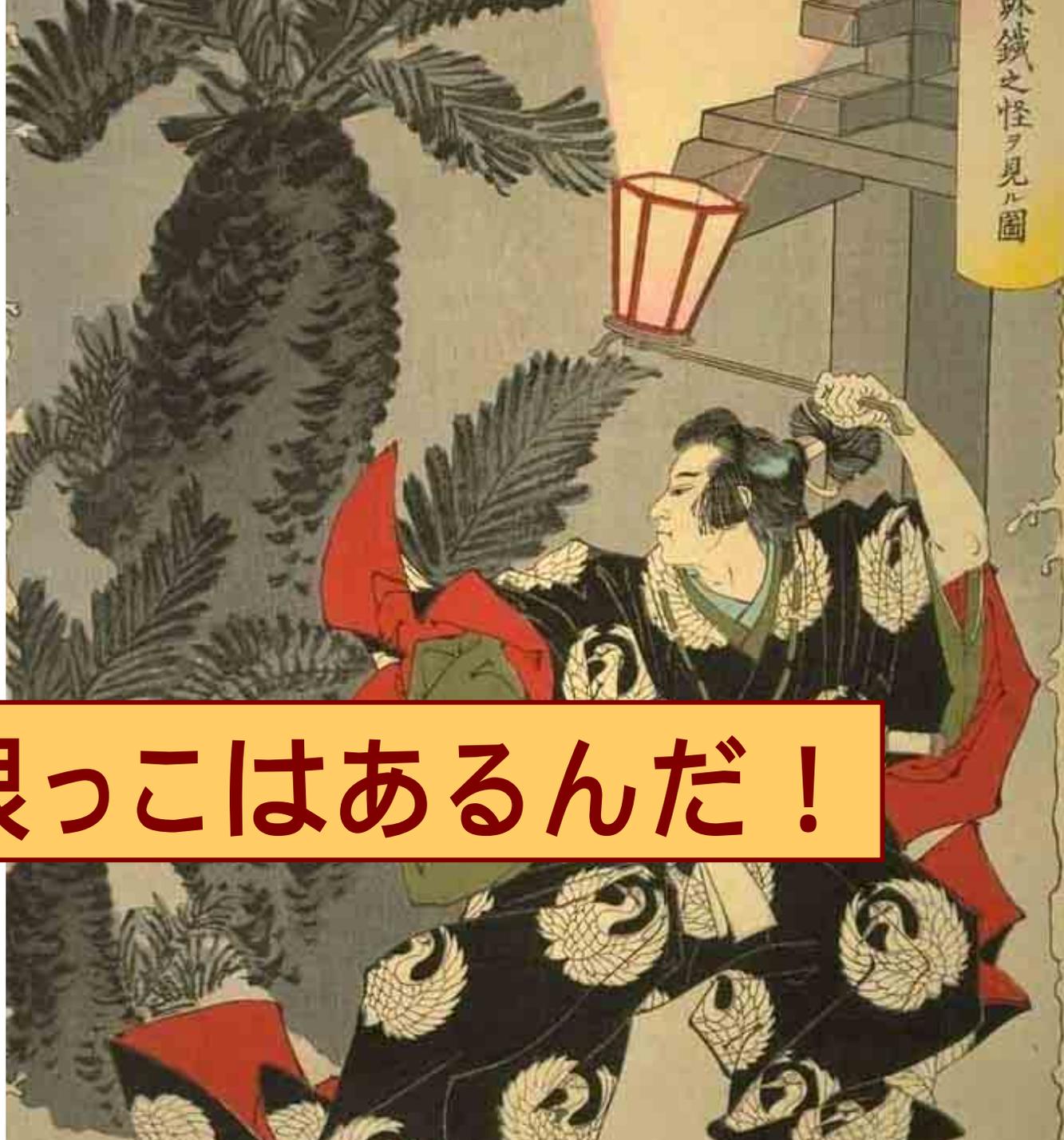
外鏡之怪ヲ見ル圖

根も葉もない伝説？



外鐵之怪ヲ見ル圖

根っこはあるんだ！



さらに余白に…

家康伝説 『鼻紙の怒』

天下は是にて取りたり 家康の気概

家康公がさる寺へ参詣なされた折のこと。諸大名が居並ぶ前で、鼻紙を一枚取り出し、腰に挿んで手水をお使いなされたところ、風が吹いて、その鼻紙がひらひらと飛んで行つてしもうた。公は走つてその紙を拾われ、手をお拭きになられた。このさまを見て、伺候の面々がくすくす笑つたところ、公は大音声にて「各々には今の仕草がおかしいか、わしは是にて天下を取つたのじゃ」と仰せられ、濡れた紙を座中に投げ捨てて、奥へお入りになられたことであつたよ。